

愛と勇気と 葬式仏教

最近、葬式仏教(薄井秀夫著、産経新聞出版、2024年6月刊)を読みました。

葬式仏教という言葉は、現代の仏教を揶揄するニュアンスをもって使われることが多いようです。しかし、この本の著者は逆に、葬式仏教こそ日本で発展した誇るべき教えと書いています。

「そもそも日本人の多くは、仏教の教えに帰依して仏教徒にわけではない。むしろ仏教側が日本人の民間信仰的な死生観を取り込んで、日本人を仏教徒にしていたのである。おそらく室町時代や江戸時代には、民間信仰的なものも、なんの疑問もなく仏教として受け入れられていたと思われる。当時の僧侶らは、何が本来の仏教かなどということには興味がなかったのだ。関心があるのは、どうすれば人々の不安を取りのぞいてあげることができるかということだった。そのためには教義にもとづくものなのかは、どうでもよかったのである。…中略…日本の仏教とは、教義的な死生観のなかには生きていないのである。」

—葬式仏教 63ページ—

お墓の仕事をしています、お墓を建て

るお客様と会い、寺院様の話を聞くなかで、長年の漠然としていた私の疑問が、ふっと解けてきた気分になりました。お客様に何宗ですかと聞くとわからない方が大半です。ただ、お墓にだれが入っているかはほとんどの方がわかっていきます。教義よりもご先祖様、その印としての遺骨が大切という感覚です。

仏教は今からおおよそ2500年前に開かれたといわれます。当時の仏教は、現在の私たちが聞く教えとはずいぶん違っているようです。

そして太平洋戦争の敗戦間際の1945年3月から5月の死者が10万人以上という東京大空襲を受けて、民俗学者の柳田國男は「先祖の話」を書きました。その意図は、これだけの苦難を受けた日本人が、これから立ち直っていくためには、先祖を大切にすることが柱になると考えていたようです。

大きな苦難に遭った時、お墓参りしなさいという助言をよく聞きます。だけれかに助けてもらおうという弱さではなく、自分を振り返り、自分を勇気づける場が、お墓なのだと感じています。そして私が子孫達に幸せになって

ほしいと願うように、きっと私のご先祖達も私たちに幸せになってほしいと願っているに違いない、先祖と自分と子孫が繋がっているという安心。今の私は自分の力だけで生きてきたのではない、過去から続くたくさんの命に支えてもらっている、だから私も次の方のために尽くしたい。そこに勇気が生まれると思っています。

(番地常夫)

蓮の咲く時 枯れる時 堤の展示場の緑 その2

当社の堤町の展示場の花壇の中頃に3つ大きな鉢があり、蓮を植えていました。母が毎年手入れをしていましたが、介護を受けるようになり丸2年はないにもかかわずになりました。3つの鉢の内の真ん中の鉢から、蓮の葉が伸びてきて、いつの間にか蕾が一本だけ大きくなり立派な花が咲きました。大きな蕾、綺麗な花、くすんだ種、枯れていく葉。そして冬を迎えます。

今年3年ぶりに花が咲きました。何も蓮の手入れをしていませんでした。今年3月に母がなくなり、その夏に咲いた大きな白い蓮の花。何かの縁を感じます。

(次のページが蓮の写真です)



展示場



8月21日 高く伸びた蕾



8月23日 14時 開く前日の蕾



8月24日 6時 花が開きました

8月25日 8時 大きく白い花弁
縁にうっすらと赤い線 中央に実ができています8月24日 16時 夕方には花が閉じます
これから4日ほど 花が開いて閉じてを
繰り返しました8月28日 8時 花びらが一枚一枚と散り
前日の雨ですっかりなくなりました10月1日 7時 ゆっくりと枯れ始め、
花の芯にあった実の中の種が黒くなってきました10月1日 7時 花の近くの葉から先に枯れて
いきます 次の命の種を残して

心やすらぐ祈りの場